
SEASONS memory

COLOR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SEASONS memory

【Nコード】

N8652I

【作者名】

COLOR

【あらすじ】

少女が出逢った恋。

その恋の始まりが今紐解かれる・・・

▼この物語は『SEASONS』URL<http://ncode.syosetu.com/n7965h/>の-spin-off作品です。

『SEASONS』を読んでいない方は先に『SEASONS』をお読みください。

資料室（前書き）

ここはSEASONS memoryの資料室です。
登場人物、舞台などの説明を書いています。

資料室

登場人物

朝倉 麻梨子（あさくら まりこ）♀・・・初登場M一

中・二年六組・手芸部所属 高・三年G組

中学二年の時に好きになった男子、柊了希の事を居一途に思い続ける。

柊 了希（ひいらぎ りょうき）♂・・・初登場M二

中・二年六組・硬式テニス部所属 高・三年G組

光心学園中等部テニス部エース。普段はパツとしないが事テニスとなると人が変わった様に輝きを放つ。と女子の間で噂されている。

水野 美夏（みずの みか）♀・・・初登場M一

中・二年五組 高・三年G組

朝倉麻梨子の無二の親友。

佐久野 豊（さくの ゆたか）♂・・・初登場M六

中・二年五組 高・三年G組

柊了希の親友。

柊は腐れ縁だと思っている。

中江 絵里（なかえ えり）♀・・・初登場M二

高・一年F組・演技部所属

朝倉舞衣の親友。

中学時代はバドミントン部でレギュラーだった。

高校でも運動部に入るつもり（バドミントン部から熱烈オフ

アーを受ける」だったが、親友朝倉舞衣と一緒に見学した演技部に魅力を感じ、そのまま入部。

伴城 武士（ともしろ たけし）♂・・・初登場M二三

高・三年G組・硬式テニス部主将

光心学園高等部男子テニス部主将。

常に実力ナンバー2だったが、柊の退部によりキャプテンに昇格。

高山 学（たかやま まなぶ）♂・・・初登場M六

中・二年七組

小学校時代からプレイボーイの名を欲しいままにしてきた。中学に入ってから朝倉麻梨子を狙う。

ルックスは申し分ないが、性格から男子全員と女子からは良くは思われていない。だが、何故か一部の女子には人気があるとかないとか…。

高校は光心学園高等部へは進学せず、他県の私立学校へ進学。

拾永 亜優（ひろなが あゆ）♀・・・初登場M一八

高・二年A組・演技部所属

朝倉舞衣が中学の時に所属していた演劇部の先輩。

一年の時に柄沢について演劇部を退部。そのまま柄沢が作った演技部の一員になる。

柄沢 明（からさわ あきら）・・・初登場M一八

高・三年B組・演技部部长

一年の時に所属していた演劇部に違和感を感じ、二年で退部。

その後一緒に演劇部を退部した同級生・後輩と演技愛好会を発足させる。一年間の努力の末、三年進学と同時に部に昇格させる。

温厚な性格のため部員からは部長として扱われていないが、

その人望は篤く、部員全員に尊敬されている。

城美 純子（しろみ じゅんこ） ♀・・・初登場M二〇

光応学園高等部教諭

朝倉麻梨子たち三年G組担任で三年生の現代社会担当。
気さくな性格で男女問わず生徒に絶大な人気を誇る。

舞台

光応学園高等部

朝倉 麻梨子達に通う学校。

中高大一貫の私立校。

高等部は山の上に立てられた緑あふれる校内。
体育祭はプチオリンピックと呼ばれ、結構有名

光応学園中等部

朝倉 麻梨子達に通う中学校。

中高大一貫の私立校で中等部は一番歴史が浅い。

高等部が立つ山の麓に立てられ、敷地は高等部の半分ほど。

Mー プロローグ

前日は花冷えの一日で咲きかけていた桜の花も凍えていたが、今日は一転して暖かい春の陽気に包まれている。

「あゝ、何か緊張するゝ。また一緒のクラスだと良いのに…ね、麻梨子！」

「うん、そうね…」

学校の玄関前に張り出された三年生のクラス割り表の前で二人の女子が話している。

「あつ！あつたわよ麻梨子」

「え！？」

「ほらっG組に朝倉麻梨子って」

「本当だわ、それに美夏！一緒のクラスよ」

互いに互いの名前を見付け合う。

「良かったゝ。麻梨子、また一年間よろしくね」

「うん、こちらこそよろしくね、美夏」

手を取り合って喜び合う朝倉麻梨子と水野美夏の二人。

（そうだ！）

急に思い出したように麻梨子はG組の男子の欄を見た。

（あつた！ウソみたい…一緒のクラスに…）

麻梨子は三年G組の男子の欄である名前を見付けた。

“ 柊 了希 ”

麻梨子が中学二年の時から片想いをしている男の名前。

（あ！）

もしかしたら傍に居るかも！と思い周囲を見渡してみたが、柊の姿は見えなかった。

「どうしたの？」

その麻梨子の動作を水野が不思議そうに問う。

「え！あつ誰か知り合いが居ないかなあつて」

「ふん」

麻梨子の返答にあまり納得していない水野。

（柊君と同じクラスになれた…）

その日の夜。麻梨子は三年前、中学二年の時の集合写真を手に取りその当時を思い起こし始めた・・・。

M二 初印象（前書き）

回想

背伸びをしていたあの頃・・・
少女は偶然を体験する

M二 初印象

三年前。

新しいクラスにも馴染み始めた四月の終わり。

「柊君^{ひいらぎ}ってカッコイイと思わない？」

「いきなり何の話よ？」

「この前さ、帰り際にテニスコートの前を通ったのよ、そしたらウチのクラスの柊君が試合してたの。で、そこで友達を待ってたから何気なくそれを見てたの…気が付いたら釘付けで見入っちゃって。

私、テニスには興味なかったけど、柊君はカッコ良かったのよ！」

目を輝かせて話すクラスメートと共に麻梨子は教室に居た柊^{ひいらぎ}了希^{りょうき}に目をやった。

「んー、そんなふうには見えないけど…」

それが朝倉麻梨子の柊了希に対する第一印象だった。

「そのギャップが良いのよ！普段教室では目立たないけど、部活ではヒーローよ！」

「ヒーロー？」

「そうよ、柊君って一年生で個人戦のレギュラー取って、県大会ベスト4なのよ！」

「へーすごいね」

我が事のように話すクラスメートに麻梨子は淡々と言った。

「すごいよ！あー思い切ってコクっちょおうかな」

「本気？」

「何よ！私はあんたみたいに毎日何通もラブレターとか貰えないもん」

僻んで言うクラスメートに麻梨子は、

「やめてよ、私は迷惑してるんだから！」

「へへ、でもどうなのアイツは？」

「アイツ？」

「ほら、しつこくせまって来てた隣のクラスの…」

「ああ、最近来なくなったのわ、諦めたのよきつと」

「いや、あーゆータイプは簡単には諦めないわよ何か新しい手を考
えてるのよ」

「まさか…」

『ガラガラ』

「あつ先生だ！」

言って席に着くクラスメート。

アイツとは隣のクラスの男子、たかやまなぶ高山学の事。

この高山という男は、中二ながら、とんでもないプレイボーイ！
小学校時代から数え切れない人数の女子と付き合っていて、中学
に入った瞬間から朝倉麻梨子に目を付け執拗以上に口説き続けてい
る。

（そういえば二年になってからは全く会ってないわ…。良い事なん
だけど）

麻梨子は高山の事を“顔は良いけど、性格は嫌な男子”と思って
いる。

（あ、連休に美夏とどこかに行こ。遊園地が良いかな）

等と麻梨子の思考は授業とは関係のないものへと変わっていった。

M三 初コンタクト

「つと、あとは戸締りをして帰るだけね」

もうすぐ夏休み。生徒は浮かれ気分で残り少ない一学期を過ごしている七月。

手芸部に所属している麻梨子は、この日一人部活で被服室に残っていた。

『トントントン』

「！」

突然被服室の扉をノックする音が室内に響き、麻梨子は驚いた！

「ハイ…どうぞ…」

動揺しながら麻梨子は応じた。

「すいませ〜ん、服、破れたんで…」

少し開いた扉から男子の声がした。

手芸部は運動部の部活中に破れたユニフォーム等の応急もしている。週に何人かその件で手芸部を訪れる運動部の生徒が居る。

「まだ大丈夫ですか？」

言って部屋に入って来たのはテニス部に所属していて麻梨子のクラスメート、柊了希だった。

「あ、柊君…」

「ああ、朝倉さん…」

二人はクラスメートという事で二、三度少し話をした程度で関係で特に親しくはない。

クラスの男子誰もが美女だと認めるほどのルックス。柊もそう思っているため、二人きりで居る今の状況に思わず“さん”付けで呼んでしまった。

「大丈夫ですよ…どこですか？」

「ああ、ここなんだけど…フェンスに引っ掛けて…」

「あ、これなら即ぐに直りますよ、ちょっと待ってくださいね」

言って麻梨子は帰り支度をしていた自分の鞆から裁縫セットを取り出した。

「じゃあ、シャツを貸してください」

柊は少し躊躇しながら。

「あの…汗で濡れてるんだけど…」

「くすっ」

柊の言葉に笑う麻梨子。

「ん？どうしたんですか？」

「すいません、男の人もそんな事気にするんだなあって、大丈夫ですよ」

柊は持っていたシャツを手渡しながら、

「…何で俺たち敬語で話してんだろ？」

「…そういえば、どうしてでしょう…」

柊に指摘され、麻梨子は“ハッ”となって答えた。

「同じクラスで、毎日顔を合わせてるのにおかしいな…ハハ」

「本当でっ、本当ね」

また敬語で言いそうになったのを慌てて言い直す麻梨子。

「アハハハハハ」

二人の笑い声が重り被服室内に響いた。

M四 不思議な感覚

「へー、巧いんだなあ……」

器用に縫う麻梨子を見て柊は素直に感想を言った。

「あ、ありがとう……家でもやるから、自然とね」

普段は人に見られてても緊張することはなかったが、柊に言われて自分でも何故だか解からない緊張感を麻梨子は感じていた。それは緊張感なのかすら解からない。

「ふーん」

なんとなくこちない雰囲気だがその後の会話は不思議と弾んだ。

・
・
・
・
・

「出来たわ」

数分間会話を楽しみながら作業をし、縫い終えた麻梨子。

「ありがとう、何かお礼しなきゃな。考えといてよ、いつで言ってくれて良いから」

「そんなお礼なんて！これが手芸部の仕事だから、気にしないで！」

「うっん、それじゃ悪いからさ何か考えといて。今はちよつと時間がないからもう行かないと、また教室で」

「え！」

「また明日」

「あ！」

そう言つて柊は早々と被服室を出て行つてしまった。

（お礼つて言われても……）

柊の言葉に少々困惑しながらも、今までに感じたことのない気持ちさが心に残っているのが解かった。

「柊君か……」

名前をつぶやき、しばらく柊の出て行つたドアを見つめていた。

翌日、教室で顔を合わせた二人だったが、互いに昨日のお礼の件を切り出せず、いつしかすっかり忘れてしまった・・・。

これが朝倉麻梨子と柊了希のファーストコンタクトだった。

M五 修学旅行

季節は巡り、夏を挟んで秋になっていた。

「じゃあ、今からバスの座席を決めるぞ」

二週間後にせまった修学旅行。

（自由行動はやっぱり美夏と行きたいなあ）

麻梨子はボーっと旅行の事を考えていた。

・
・
・
・
・
・
・

そして迎えた修学旅行当日。

「私、京都は初めて。麻梨子は？」

クラスは違うが、なんとか自由行動を共にしている水野美夏が言った。

「私も京都は初めて」

「京都は、か…」

「え？」

「ううん。ね、まずはどこへ行く？」

「そうね…」

二人は手に持っていた観光用の簡易地図を広げて京都見学の予定を立てはじめた。

「久しぶりだね、朝倉ちゃん」

少しして二人の背後から男が声を掛けてきた。

（ゲ！）

その声を聴いた水野は全身に虫唾が走るのを感じた。振り返って確認するまでもなくその声の主が特定できた。特定できたからこそ振り返ってまで確認しなくなかった。

しかし、放っておいてどうにかなるものでもないので思い切って振り返ると、麻梨子も同時に振り返った。振り返った目線の先には

予想通り極悪プレイボーイ高山学^{たかやまなひ}が立っていた。

M六 助っ人

「な、何か用？」

水野があらさまな苦表を浮かべながら言った。

「僕は朝倉ちゃんに用があるんだけどね」

すると鼻に付くキザっぱい言い方で高山が言った。その口調が余計に水野に不快感を与えた。

「何か用？」

今度は麻梨子が訊ねた。

「今日は僕と一緒に回らないかい？いや、明日も明後日も」

「悪いけど…美夏と回るから無理よ」

きっぱりと言う麻梨子に、

「じゃあ、水野君も一緒にいいよ」

まるで『自分の誘いを断るはずはない』という自信たっぷりの言い方に頭かに『ムッ』とする麻梨子と水野。

そんな二人を意に介さず高山は、

「さ、どこから行こうか？」

言つて、強引に麻梨子の手を取った！

「ちよっ！」

びっくりする麻梨子。

「麻梨子っ！」

水野が慌てて二人の手を引き離れた。

「何するんだ！」

水野の行為に高山の態度が豹変した！

「キャッ！」

「何してんだ、お前ら」

そこへ柊と佐久野豊さくの ゆたかが通りかかった。

「柊君！」

思わず柊の名を叫んだ麻梨子。

「またナンパか？相変わらず飽きずにやってるなあ」

瞬時に状況を判断した佐久野がバカにするような口調で高山に言った。

「なんだと」

「おゝコワ」

怒る高山をさらに挑発する佐久野。

「今のうちに早く行つて」

佐久野が高山の相手をしている間に、柊が麻梨子と水野を促がした。

「うん、ありがとう」

お礼を言いながら水野が麻梨子を連れてその場から走り去った。

M七 不可解な感覚

「おい、待て！」

柊に促されてその場から逃げようとしている麻梨子と水野に気付いた高山が慌てて二人を追いかけてようとした。

「うお！」

二歩目を踏み出した所で高山は転んでしまった！

「あゝあ、慌てるから」

それを見て柊が言った。実は一目散に二人を追おうとした高山の足を柊が引つ掛けていた。その様子を遠くから水野と麻梨子が見ていたが、転んだ高山を確認すると再び二人は走り始めた。

柊もその二人の姿を確認し、意識を高山に向けた。

「嫌がるコを無理矢理連れて行くのは良くないなあゝ」

高山を見下ろしながら佐久野が言った。

「くそっ！おぼえてろよっ！」

高山はヨロヨロと立ち上がると、吐き捨てるように言ってその場から逃げ去った。

「ヘイヘーイ」

佐久野が笑いながら言った。

高山は格好を気にする表面だけの男で、実際は何も出来ないことを二人は知っている。そんな高山の後姿を見ながら二人は笑っていた。

「ハハハ。で、どうする？」

佐久野が柊に話し掛けると、柊は麻梨子たちが逃げた方を見ながら、

「そつだな、とりあえず何か適当に食いに行くか？」
言った。

「そつだな」

・
・
・
・
・
・

「助かったわね、麻梨子」

「うん……」

先刻の場所から結構離れた所で二人は息を整えた。

「後で二人にお礼をしなきゃね」

「……………」

水野の問い掛けにうわの空の麻梨子。

「ん？どうしたの？」

「え！何だっけ？」

「だから、後で柊君と佐久野君にお礼しなきゃねって」

「あ、そうね」

（ヘンな麻梨子）

水野は麻梨子を見て思った。

麻梨子自身も理解できない気持ちに支配され訳が解からない状態だった。

M 八 言いたいお礼、会いたい気持ち

「いや、たまたま通りかかったからそんな気を使っただけのことでもないよ」

「でも、本当に助かったのよ」

その夜、宿泊しているホテルの廊下で麻梨子と水野は佐久野に昼間の礼を述べていた。

「だからって何か奢ってもらってほどの事じゃないよ。その気持ちだけ貰っとくってやつで」

「そう…本当にありがとね」

水野と佐久野のやり取りを横で見ている麻梨子。

「その…柊君は？」

麻梨子は恐る恐る佐久野に柊の事を尋ねた。

「え、柊。さあ？あいつとはクラスが違うから。ホテルに着いてからは会ってないから、自分の部屋に居るんじゃないか？」

「そう…」

「柊には俺から言っというてあげるけど」

「うん…」

「本当に今日はありがとね」

「いいって。じゃあ俺そろそろ行くけど」

「うん」

水野は手を振りながら佐久野を見送った。

「もう！一緒に居てくれれば楽だったのにね、麻梨子」

「うん…」

「どうしようか、まだ自由時間あるし」

「え？柊君にお礼言わないの？」

「え、佐久野君から言っというてくれるって。それに部屋にまでわざわざ行くのもねえ…」

「そう…よね…」

水野の言葉に急に沈んでしまう麻梨子。

M九 モヤモヤ

「ね、ロビーで何か飲まない？」

水野が言った。

「うん…。あのね、私、ちゃんと会ってお礼が言いたい」

「え？」

「柊君に…」

「麻梨子…」

柊に会ってお礼が言いたい。それは麻梨子の本心からの思いだった。

「うん…じゃあ、そうしようか」

「うん」

二人は同時に今歩いてきた廊下を引き返し、男子の泊まっているフロアにむかった。

「でも麻梨子、柊君の部屋どこか知ってるの？」

「あー！」

男子の部屋割りまで麻梨子が把握しているはずもなく、途中で歩を止めた。

「どうしよう…」

「でもまあ、しばらく廊下で待ってれば出てくるかもよ」

「うん、そうね…」

とりあえず男子の泊まっている階にエレベーターが止まり、廊下に出た二人。

「良かった〜とりあえず先生は居ないみたい」

静まり返った廊下に麻梨子と水野の二人だけが立っている。一度二人はフロアの端まで歩いて、再びエレベーターの前に戻ってきた。この間も教師と鉢合わせにないかと神経を尖らせていた二人は、ただ数十メートル歩いただけでひどい疲労感を感じていた。

「やっぱりどこか分からないわ」

ため息混じりに水野が言った。

「美夏面倒だったらもう良いよ。後は私一人で待つてるから」

「なに言ってるんのよ麻梨子。私だって助けてもらったんだから最後まで付き合うわよ」

「ありがとう美夏」

アテもなくただフロアで柊が現われるのを待っていたが、その間誰一人そのフロアに現われずとうとう就寝の時間になってしまった。

「これ以上は無理ね、先生にこんな所で見付かると面倒だし」

「うん…そうね…」

二人は自分たちのフロアに移動した。

・ ・ ・ ・ ・

「じゃあね麻梨子。同じクラスなんだから、明日またお礼を言うチャンスがあるわよ」

「うん…」

二人はそれぞれ自室へと戻っていった。

（何、この胸のモヤモヤは？）

（でも嫌な気持ちじゃない）

何ともいえない違和感を抱きながら、麻梨子は眠りに就いた。

M一〇 理解した気持ち

「んっ…んー、もう朝…?」

部屋中に響く有線のタイマーで麻梨子は目覚めた。

「おはよう…麻梨子お」

トーンダウンしたハスキーボイスで同室のクラスメートが言った。

「うん…利沙^{りさ}、おはよう」

麻梨子も返す。

「さすがの麻梨子でも朝は苦手みたいね」

なかなかベッドから体を起こさない麻梨子を見て、笑いながら利沙が言った。

「え?そうかなあ?」

普段寝起きの良い麻梨子だが、この朝は布団から出たくなかった。

それは昨夜見た夢が原因だった。

(柊君が夢に出てきた…何故?)

その夢を思い出すと、不思議と胸がドキドキした。

(この余韻が心地良い…)

「麻梨子、そろそろ用意しないと、遅れるわよ!」

(あ!)

ベッドでウダウダしている麻梨子とは対照的に、利沙は既に着替えを終えようとしていた。

麻梨子はベッドの頭にある時計を見た。

「七時一〇分!」

言いながら麻梨子は慌てて飛び起きた。

七時三〇分から朝食のバイキングが始まる。麻梨子は大急ぎでパジャマ代わりの体操服から制服にきがえ、食堂へと移動した。

「くすっ」

その光景を見ながら利沙は微笑んだ。普段の麻梨子の優等生ぶりからは想像も出来ない目の前の光景に。

・ ・ ・ ・ ・

（間に合った）

集合のリミット5分前に食堂に到着した麻梨子たち。

（ハッ！）

自分の席に移動する途中柊の姿が麻梨子の目に入った。

柊を見ただけで鼓動が大きく脈打つ。『カーッ』と顔が赤くなるのが自分でも判った。

途端に恥かしくなり、周りに気付かれないようにして足早に席に着いた。実際にはそんな麻梨子の変化に気付いた者は居なかった。

・ ・ ・ ・ ・

それからの修学旅行中、恥かしさで麻梨子は柊と会話どころか顔すらまともに見ることが出来なかった。

それが柊への恋心だと気付いたのは修学旅行から帰った数日後だった・・・。

（あれから私は、想いを告げる勇気を持ってないまま柊君を見つめる事しか出来なかった…。でもまたこうして同じクラスになれた…。今度こそ後悔しないように、自分の想いを告げよう。それがどんな結果になっても私はそれを受け止める）

あれから三年弱。

『もう後悔はしない！』

そう心に誓い写真をアルバムに納めた。

M 一 入学式（前書き）

物語は再び現在へ

新たな希望にあふれる春

少女たちは希望と出逢いに心を躍らせる・・・

M 一 入学式

「じゃあ行つて来るね、お姉ちゃん」

「お母さんによろしくね」

「わかつてるわ」

真新しい光応学園高等部の制服に袖を通した麻梨子の妹、舞衣が家を出て行つた。

今日は入学式。前日新しいクラスに進級した麻梨子たち在校生は休校日である。

「あゝあ、することなくなっちゃた…美夏に電話してみよ…」

家で独りになってしまった麻梨子は携帯電話を手に取つた。

・ ・ ・ ・ ・

「……であるから、我が校は文学だけでなく、生徒の日常生活の充実に結び付いているのです」

（もゝ、何で校長先生の話つてどこもこんなに長いものよ？）

かれこれもう三〇分以上も続いている校長の長話に些か嫌気がしていた舞衣。しかしそんな苦行もこの後考えているある事を思うとなんとか凌いでいけると感じていた。

（早く終わらないかな）

それを思うとワクワクしてきた。

・ ・ ・ ・ ・

「以上で第十七期光応学園入学式を終わります」

「やっと終わった」

終了を告げる教頭の言葉を聞いた舞衣は小声で開放感を表した。式が終わると、新一年生は体育館を出て皆一往に保護者と話を始めた。

「舞衣っ」

舞衣の背後から母親が呼び止めた。

「あっママ」

「ママはもう空港に行かないといけないから……」

この四月から仕事の部署が変わり、年中海外を飛び回ることになった舞衣の母親。忙しい仕事の合間を縫って何とか入学式に出席していた。

「うんわかってる、気を付けてね」

「うん、麻梨子にもよろしく言ってね」

「分かってる」

「舞衣も気を付けるのよ」

最後に強く念を押すように言っ、舞衣と別れた。

父親は既に以前から海外出張に出ている、家に居るのは月に何日かという状態。

それに加え母親もそれと同じ状況になってしまい、家には麻梨子と舞衣の二人だけになる事が多くなってしまった。そのため家には万全のセキュリティシステムを配備している。

半年前に舞衣、麻梨子二人の姉が結婚したのだが、近所に住んでいる為、たまに姉夫婦も家で過ごす事があるが、それは稀でほとんどは近所の本低に済んでいる。

実質二人暮らしの状況に母親は不安を感じながら渡航した。

M 一 二 行 動

母親と別れた舞衣は自分たちの教室での一連の行事を終え、小学校時代からの親友中江絵里と合流し部活見学に出た。

「残念ね、同じクラスになれなくて…」

まず、絵里が切り出した。

「でも隣のクラスになったんだからまだ良い方よ。体育だっで一緒なんだから」

「二人はまずグラウンドへむかった」

この日は入学式で在校生は休みだったが、午後からは部活がある。新一年生は式が終わると各自好きに帰って良いのだが、ほとんどの生徒は舞衣たちの様に部活見学に赴いていた。

「絵里は何部に入るの？」

「んー、何にしようかなあ…」

「バドミントンはやらないの？」

「んー、バドミントンも良いんだけど、他のもやってみたいしなあ。舞衣は？」

「私んち、今年から両親がほとんど家に居ないから…」

「そっか、ごめんね」

舞衣のテンションが低くなり、つられて絵里もテンションダウンした。

「気にしないで、さっ行こっ」

その場の空気を察知した舞衣は笑顔で言った。

その頃麻梨子は、遊びに行こうとして連絡した水野の都合が付かず、どこへも行けずに家で暇を持て余していた。

M 一三 浮き沈み

「次はテニス部を見に行こっ」

舞衣が言っと、

「ごめんね、結局私に付き合ってもらう事になって…」

先刻の事で申し訳なく感じている絵里が返した。

「だから気にしないで、私も楽しいから」

舞衣は本心から楽しんでた。というよりこれからが舞衣にとって楽しくなる時間だ。式の最中からずっと楽しみにしていた事がこの後現実になるのだから。

・ ・ ・ ・ ・

「ここがテニス部ね」

二人はグラウンドから少し上った丘の上にあるテニスコートに着いた。テニス部は人気があるのか？二人の他にも既に何十人もの新入生が見学に来ていた。

「うわっ！凄い人」

テニスコートに群がる新入生たちを見て絵里が驚く。

「人気あるんだねテニスって…バドミントンなんて見学者居なかったのね」

「・ ・ ・ ・ ・」

「舞衣？」

返答のない舞衣に再度絵里が話しかけた。

「え？」

「どうしたの？キョロキョロして」

「え！なんでもないよ。ただ人が多いなあと思って…」

「だから人多いねって言ったのに」

「あ、ああ！多いね…」

（ここって女子のコート？）

絵里の問いかけにも半分上の空で、目の前のコートをキョロキョ

口見ている舞衣。

「絵里、ちよつとごめん…」

「え？うん」

急に舞衣がその場を離れようとした。その舞衣の態度を見た絵里はトイレにでも行くのだろうと理解した。

しかし舞衣がむかつた先はトイレではなく男子のテニス部が練習するもう一つのテニスコートだった。先刻から楽しみにしていた事を実行に移したのだった。

（多分、絵里は変に思ってるだろうな…）

自分の状況を把握しながら舞衣は女子テニス部のコートを離れ、コートの奥に見えたもう一段高くなっている丘を目指した。

「あ！」

二十段程の階段を駆け上った舞衣の目にもう一つのテニスコートが飛び込んできた。

（やつと、先輩をこの目で見れる！）

舞衣は逸る気持ちを抑えきれず小走りで男子が練習するコートへ急いだ。

男子テニス部は女子の練習しているコートの近くにある一段高くなったメインコートで練習していた。もちろん初めてこの場所に来た舞衣はその場所を知らなかったが、自分の位置から見える人だけがそれであると直感で悟っていた。

その人だかりの間から男子のテニス部が練習しているのが確認できた。

（やった！）

その光景を見た瞬間舞衣は歓喜の心情を抱いた。

男子テニス部もまた人気が高く大勢の見学者で溢れていた。中には見学目的以外の女子も何人か混ざっていた。

（先輩どこ？）

舞衣はこつたがえす人だかりの隙間を縫い何とか前列まで漕ぎ着け、練習中の男子テニス部員を確認した。

（あれ？）

コート of 隅々まで見渡す舞衣。それでも目的を達成できない舞衣は再び溢れる見学者の間を移動しテニスコートの周りをウロウロしはじめた。

「女子のコートはあっちだよ」

急に声を掛けられ驚く舞衣！

声がした方を振り向くとそこにはテニスウェアを着た上級生の男子が立っていた。

「あ、あの…」

舞衣は背に腹は替えられないと思いその上級生に対しもじもじと口を開いた。

「ん？」

「柊先輩はどこですか？」

勇気を振り絞り、舞衣はその上級生に訊ねた。

「ヒイラギ…？ああ、柊ね。あいつならテニス部辞めたよ」

「え！やめたんですか？」

思いもしない返答に舞衣は絶句しそうになった。

「ああ、去年の秋に」

「そうなんですか…どうもすみません」

上級生はまだ何かを付け加えようとしていたが舞衣はそれを無視して言った。今まで昂っていた気持ちの反動から一気に舞衣の気分が沈んでしまった。

「あつそうだ、オレ、あいつと同じクラスだから、用があるなら伝えといてあげるけど」

「いえ、いいんです…すみません、邪魔しちゃって…」

言って、トボトボと歩いて行く舞衣。

「あつ！おい」

「伴城キャプテン」

上級生は舞衣を呼び止めようとしたが、逆に他の部員に呼ばれてしまった。

「…すげ〜カワイイコだったなあ…」

ゆつくり遠ざかっていく舞衣の後姿を見ながら男子テニス部キヤプテン・伴城武士は小声で呟いた。

（先輩、テニス辞めちゃったんだ…）

憧れの先輩を一目見るというこの日最大の楽しみをいきなり奪われてしまい、意気消沈する舞衣。

・
・
・
・
・
・

その後舞衣は、絵里に悟られない様に明るく振舞い、その日の残りを憂鬱を抱えながら過ごした…。

M一四 自己紹介、くしゃみ

「じゃあ、先に行くわよ」

言って家を出た麻梨子。

入学式から一夜明け、今日から新学期がはじまる。

（やっと柊君に会える…楽しみ…でも、私の事覚えてるかな？）

今日の事を思うと昨日一日がとても長く感じられた麻梨子。そんな感覚を紛らわそうと出掛けに行く事を計画したが、それも結局出来ずやっこの思いでこの朝をむかえた。いざむかえてみると期待感の反面、不安感も同時に抱えていた。

麻梨子は家から学校までの通学路を歩いて登校している。たまに自転車を使うこともあるが、それほど遠くない距離のためなるべく歩くようにしている。

不安感もあったが、比較的速い足取りで学校に到着した。

『ガラガラ』

教室の扉を開くと数人の生徒が既に登校していた。

「おはよっ 麻梨子」

先に登校していた美夏があいさつした。

「おはよっ 美夏」

麻梨子も同じ様に軽快にあいさつした。

「昨日、ごめんね」

少しの間美夏と会話した麻梨子は自分の席に移動した。その途中、柊の席であるう席を見た。しかしそこにはまだ誰も座っておらず柊がまだ登校していないことを物語っている。

麻梨子は自分の席に着くと、一緒について来た美夏との会話の続きを楽しんだ。会話しながらも時折教室に入ってくる生徒を確認する麻梨子。そんな麻梨子を見た美夏は、

「どうしたのさっきから？誰か待ってるの？」

「えー！」

美夏に気付かれ問われた麻梨子は咄嗟に、

「ひいつ…！」

「ひい？」

「ううん！だっ誰が同じクラスなのかなあって思ってた…」

「どうしたの？そんなに焦って」

「ううん、なんでもないのでよ！」

「変なの」

咄嗟とはいえ、危うく柊の名前を言いそうになった麻梨子。美夏も（やっぱり最近の麻梨子は何かおかしい）と思ったが口には出さなかった。

しばらくして一時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。

『ガラガラ』

と、同時に教室の後ろの扉が開いた。

「じゃあ麻梨子、私、席に戻るね」

言って、美夏が麻梨子の席を離れた。

「うん」

言って、麻梨子は直ぐに後ろを振り返った！

そこには自分の席に向かって歩く柊の姿があった。

（柊君…）

麻梨子は約三年ぶりに間近に見る柊に感激した。

そのまま柊が自分の席に座るまで見届けた。

柊が椅子に腰掛けた瞬間、再び柊と同じクラスになれた事を確信した。同時に三年前と変わらず柊に恋心を抱いている事を麻梨子は実感した。

（覚えてますか？中学二年の時に同じクラスだった朝倉麻梨子です。私はこの三年間、片時もあなたを忘れた事はありません…これから一年間よろしく願います…）

麻梨子は祈る様に、言葉に出来ない自己紹介を柊に送った。

「クシュンッ」

すると柊が突然くしゃみをした！

「クスッ」

麻梨子は『自己紹介が伝わった』と思い、思わず笑ってしまった。

M一五 姉の思い、妹の思い

「おーい、柊」

「あ？何だ、トモか」

男子テニス部部长、伴城武士が柊に歩み寄った。

「昨日新入生の女の子がお前を訪ねてコートに来ていたぞ！知り合いか？」

「あゝ？新入生？しかも女の子なんか知り合いなんか居ないぞ。大体、俺の知り合いならテニス部に居ないの知ってるだろう？」

「だよな、お前が居ないって言ったらめっちゃ落ち込んでたぞ。しかもすげーカワイイ娘」

「マジ！？」

伴城の最後の言葉を聞いて、少し残念に思う柊。

「まー、インターハイでお前が優勝した時にファンになったコだろ？」

「・・・・・・」

（誰だ？）

少し気になったが、しばらくすると忘れてしまっている柊であった。

・
・
・
・
・

（午前中で学校が終るのは良いけど、もっと柊君と一緒に居たかったなあ）

放課後、そう思いながら麻梨子は帰宅した。

「あつお姉ちゃん、おかえり」

先に家に帰っていた舞衣が食事の用意をしていた。

両親が家に居ない事が多いので食事当番は日替わりで麻梨子と舞衣がこなしている。

「あつそつだ、舞衣。部活何にするの？」

「え！」

麻梨子の質問に夕食の支度の手を止めた舞衣。

「何につて、私、部活しないよ」

「なぜ？」

「だって、食事当番とかあるし……」

「そんな事にしなくて良いわよ！」

「お姉ちゃん……」

「あなたまだ演劇やりたいんでしょ？」

「うん……」

「ならやりなさいよ。食事当番なんてどうでもいいわ、やりたい事があるならとことんやりなさい」

「うん！ありがとう、お姉ちゃん！」

言つて、舞衣は麻梨子に抱きついた。

麻梨子も舞衣を抱き止め。舞衣のストレートヘアを優しく撫で下ろした。

「さ、夕食にしましょ」

「うん、ちよつと待ってね」

舞衣は再びキッチンへ、麻梨子は着替える為に自室へと足を運んだ。

M一六 さつそく見学

「え！部活するの？だって昨日」

昼食のサンドイッチを頬張りながら絵里が驚いた口調で言った。

「うん、昨日お姉ちゃんに話したら、やりなさいって」

「良かったじゃん、で、どこに入るの？」

「やっぱり演劇部かな…」

「やっぱりね、じゃあ今日の放課後さつそく見学に行こつ。私も付き合っから」

「ありがとう」

二人は昼食の会話を楽しんだ。

・
・
・
・
・
・
・

放課後、二人は帰り支度をして演劇部が練習場所になっている視聴覚室へ行った。

「すいません…」

視聴覚室の扉を開け、恐る恐る挨拶をする二人。すると、

「あれ？もしかして見学の一年生？」

部長らしき男子生徒に声を掛けられた。

「は、はい」

緊張する舞衣に対し部長らしき生徒はニツコリして、

「どうぞ、入って」

舞衣たちを招き入れた。

「今日は見学者が多くてね、君らで八人目だよ」

「へ」

絵里が応えた。絵里はわりと気さくな性格であり人見知りしない性格。どちらかと言えば人見知りする舞衣にはそんな絵里の性格が羨ましかった。

視聴覚室の段段になった席の最上段に見学者が座っていた。

舞衣と絵里もそこに陣取り練習風景を見学する事にした。

「ふーん、これが演劇部の練習なんだ…なんか殺伐してるね」

絵里が小声で舞衣に言った。

「あれは腹式呼吸の練習してるのよ。お腹から声を出すってよく言うじゃない、あれよ」

「ふーん」

舞衣の説明にイマイチ興味無さ気に生返事をする絵里。今まで運動系のクラブに入っていた絵里には目の前の光景はただ淡々としたものに映っていた。

M一七 演技部

「ごめんね、暇だったでしょ？」

視聴覚室を出て舞衣は一言目の言葉を絵里に発した。数十分間演劇部の淡々とした練習風景を見学していたが、さすがの舞衣も痺れを切らせていた。

「まあ、正直暇だったけど、いい体験になったわ」

「ハハハハハ……」

絵里の言葉に苦笑いする舞衣。

「で、ここに決めたの？」

絵里は舞衣に問い返した。

「……うまく言えないんだけど、何か違うのよね……」

舞衣は二〇分程の見学で演劇部に違和感を覚えた。その違和感が何なのか舞衣自身もはっきりと解からなかったが『ここは自分の居る場所じゃない』という事ははっきりと悟った。

「それに、中学の時の先輩が一人しか居なかったのも気になるのよ……」

舞衣は巧く説明出来なかったが、思っている事を絵里に伝えた後一言付け足した。

「じゃあ、演劇部は諦めるの？」

「ううん、もう一つ気になる部があるの……」

言って、舞衣は一枚のプリント用紙を取り出した。

「何それ？」

「クラブ紹介のプリント」

「どうしたのそれ？」

「え！どうしたのって、入学式の日に貰ったじゃない」

「そうだったっけ？」

「絵里……」

絵里の人当たりの良さは尊敬に値するが、こういう性格でもある

ことを舞衣は思い出した。

「とにかくこれに書いてあるのよ…これ」

これ以上このプリントの話をしてもキリが無いと思った舞衣は話を本題に戻し、プリントに書かれた一つの部を指差した。

「えんぎぶ？」

「そう、演技部。ちょっとこのぞいてから帰ろうと思うの」

「よし！行こっ！」

「え、良いの？絵里。また暇になるかもしれないよ」

「なに言ってるのよ乗りかかった船よ、最後まで付き合っわよ！それに一人だと心細いでしょ」

「ありがとう、絵里」

二人は演技部が普段使用しているという多目的教室へとむかった。

M一八 演技部2

「三階つてのはちよつと疲れるわ……」

絵里が扉の前で言った。演劇部の見学に時間を使ってしまったため二人は急いで多目的教室までやって来た。

『ドッ!』

突然部屋の中が騒がしくなった!

「何かな?」

「さあ……」

二人は演劇部の時と同じくまたも恐る恐るノックした。

『ガラガラ……』

少しの間を置いて扉が開き中から人が現われた。

「すいません……ここ、演技部の……」

一礼しながら舞衣が言うつと、

「そつよ、あら?朝倉?」

その声を聞いた舞衣が顔を上げた。

「拾永先輩!?!」

「なに、見学に来たの?」

「はい!」

部屋から現われたのは舞衣たちの一つ上の上級生・拾永ひろなが亜優あゆだった。舞衣が中学二年の時の演劇部部长だった人物。ようやく会えた中学時代の演劇部の先輩に舞衣のテンションが上がった!

「そつか、演劇部の方は気に入らなかったのね」

舞衣たちを招きいれながら拾永が言った。

「いえ、そういうわけじゃなくて……」

「私も去年、この部が出来てすぐに演劇部からこっちに移ったんだけどね」

「そつなんですか!どうしてですか?」

舞衣の素朴な疑問に拾永は昔を懐かしむ様に話す。

「簡単な理由よ、ここの雰囲気が入ったのよ。ま、百聞は一見に如かずよ。あつ部長！」

拾永は一人の男子生徒に声を掛けた。

「はいはい、何ですか？」

一見、温和そうな人が近寄って来た。

「この子、私の後輩とそのお友達。今日見学したいらしいです」

「よろしくおねがいします」

「あつします…」

舞衣と絵里が部長に挨拶した。

「あつ初めまして、えっと、演技部部长をやってる三年の柄沢からさわです。んー、見学と言われても今日はセット作りで部活らしい事はなんにもないけど…それでも良いかな？」

「ハイッ」

柄沢の言葉に舞衣は元氣良く返事をした。たつたこれだけのやりとりだったが、拾永の言っていた事が理解できた気がした舞衣だった。

こうして舞衣たちは演技部の見学をした。

M一九 決意！

「ごめんね、こんなに遅くまで付き合ってもらって」

すっかり夕暮れに染まった空の下、下校中の舞衣が絵里に言った。

「ううん、気にしなくて良いよ。でもまさかセット作りを手伝わされるとはね……」

「ごめんね、拾永先輩ってああいう人だから……」

舞衣は苦笑を浮かべながら言った。

「ううん、良いのよ。楽しかったし」

「私も楽しかった。あの部のみんなが和気藹々としてて。拾永先輩の言ってた事が解かったわ」

舞衣は一旦口籠ると、

「……私、演技部に入るわ！」

何かを決意した時の様に握りこぶしを作りながら言った。

「良かったわね、やりたい部活が見つかった」

「うん、ありがとう絵里」

舞衣の言葉を聞いた後絵里は少し考え、

「よし決めた！」

こちらも決意に満ちた口調で言った。

「どうしたの？」

急に絵里が声を上げたので舞衣はびっくりして訪ねた。

「私も演技部にする！」

「え！本当？」

全く思いもしなかった絵里の言葉に舞衣は絶句に近い驚きを感じた。

「うん、バドミントン部でいいかなあって思ったんだけど、実は迷ってたの。でも今日の見学で運動部じゃなくても良いかな？って。

演技は無理だけど、ああいう裏方も良いかなって思ったの。私も演技部に入るわ。ヨロシクね舞衣っ」

「こちらこそよろしく、絵里！」
薄暗くなった帰り道で二人の少女は手を取り合って喜んだ。

M二〇 席替え

「元気してたあ？」

教室に入って来た美夏が一番に自分の席に座っていた麻梨子に駆け寄り言った。

ゴールデンウィークの連休が明け五日ぶりに学校が始まった。

「うん、元気にしてたよ。はい、これおみやげ」

そう言っただけ麻梨子は鞆から包みを取り出し、美夏に手渡した。

「うわあ、ありがとう。どうだった？フランスは」

「うん、良かったよ」

「いいなあ、麻梨子のことって毎回連休の度に海外に行ってるよね」

「ごめんね、本当は美夏とどこか行きたかったんだけど両親に会うの二ヶ月ぶりだったから……」

「謝らないで、麻梨子はずっと一人暮らしみたいなのだから仕方ないよ」

一時間目の授業が始まるまで二人は話し込んだ後、自席に歩いていく美夏を見送った麻梨子。そしてそっと柊の方を見た。

（柊君…元気でしたか…？）

（苦しい…私のこの想い…伝えたい…）

柊と一緒にクラスになって一ヶ月、特にこの数日麻梨子は柊の事を考えると胸が苦しくなった。日に日に柊への想いは強くなるばかりだった…。

・ ・ ・ ・ ・

「もう一学期が始まって一ヶ月が経つから、そろそろ席替えをでもしましょうか？」

歴史の授業中、時間も終わりに近付いた時、担任でもある城美純子先生が提案した。

「賛成！！」

クラス中が賛成した。

・ ・ ・ ・ ・

（サイアク…）

席替えが終了した直後麻梨子は思った。

（美夏の席が遠い…お昼が面倒だわ！それに授業中に柊君の姿が見えない…）

今までの席は麻梨子の席の斜め前に柊の席があつたため、後姿ではあるがいつでも柊の姿を確認できた。しかし、今回の席替えで麻梨子は廊下側の一番前。柊は窓際の前から三番目の席になってしまった。この位置関係では麻梨子が少し振り返らなければ柊の姿を確認する事が出来なくなってしまった。

（あゝ、ブルー…）

こんな事なら席替えなんてしなくて良いのに！と宛てのない苛立ちを募らせた麻梨子だった。

M二 指摘

梅雨が始まり来る夏までの憂鬱な季節が巡ってきた。

「朝倉」

「はいっ」

麻梨子は席を立ち、先生から中間テストの答案用紙を受け取った。

（自信なかったけど、良かった）

「まゝりこ。数学どうだった？」

休み時間に美夏が訊いた。

「うわっ 89点！私は72点よお」

麻梨子が答える前に麻梨子の手から答案用紙を盗み見た美夏がわざとふてくされて言った。

「でも、いつも90点以上なのにどうしたの？」

「…ちよつと勉強できなくて…」

「…どつか悪いの？そういうえば、最近の麻梨子って時々変よ」

「えっ！そう？」

「うん、たまにぼくとして考え込んでたり…」

「ううん大丈夫、何もないわ」

美夏の指摘がズバリ的を得ていたため麻梨子は慌てて否定した！

「そう？ならいいんだけど、ヤバイ病気にならないでね」

「それは大丈夫…」

美夏の言葉に目一杯の笑顔と苦笑いで答えた麻梨子。

『キーンコーン カーンコーン 〜〜〜』

「あっチャイムだ！休憩時間ってどうしてこんなに短いんだろ」

言いながら美夏は自分の席に戻った。

（傍目から見てもそんなに变だったんだ…私…）

そんな事や勉強が手につかなかった事は全て柊の事を考えていた事に起因するのを麻梨子自身解かっていた。

M二二 抑えきれない行動

「麻梨子、教室締めるわよ」

日直が教室の鍵を締めようとしている。

「あつ私がやるから、先に帰っていいよ」

「じゃあ、お願いね」

「うん」

その日の放課後。麻梨子は誰も居なくなった教室に居た。

「柊…君…」

麻梨子はそつと柊の机に手をあて、しばらくその場に立っていた…。

「あなたに私の気持ちを知って欲しい…そのための勇気を私に…」
祈るようにつぶやいた。

麻梨子はこの数日間、勉強をするという口実で放課後の教室を使っていた。実際に納得の出来なかった中間テストの遅れを取り戻す為にやっているが、本当の目的は教室に人が居なくなるのを待つ事だった。

教室に麻梨子以外の生徒が居なくなると柊の席に移動し、ぼんやりする日々を送っていた。

まるで異常者の様な行動だと本人も解かっていたが柊の事を考えるといてもたつてもいられなくなってしまう。

抑えきれない衝動と共に柊の席に座り窓の外を眺めていた。

ぼんやりしていると時間だけが過ぎていく。窓の外はすっかり西日に染まり鮮やかなオレンジ色の空間になっていた。

「こんな時間まで何してるんだろ…私…」

独り言をつぶやく。その時、

『バタバタッ』

静まり返った教室に廊下から走って来るらしい足音が聞こえてきた！しかもそれはこの教室に近付いてきている事が分かった。

麻梨子は些かの恐怖で柵の席から立ち上がった！

M二三 焦燥

『ガラガラ』

瞬間教室の扉が開いた！

「！」

麻梨子は焦った！廊下から近づいて来る足音が聞こえた瞬間、この教室に入ってくる事も少しは予測していた。しかし実際に扉が開くとなんとも言えない恐怖感が麻梨子を襲った。

教室に入ってきたのは何と柊だった！

逆光になっていて、麻梨子からは柊だと視認出来るが、柊からは逆光の中に立っているのが誰なのか判らなかった。

柊は逆光の中の人物が誰なのか確認しようと麻梨子に近付いた。

「柊…君…」

麻梨子は焦りと興奮でどうして良いのか判断できず、思わず柊の名を呼んだ。すると柊はその場で足を止め、

「こんな遅くまで何やってんだ？」

冷静に麻梨子に問いかけた。

麻梨子は咄嗟に、

「え！ちよつと調べ物を…」

本当の事など本人に言えるはずもなく、ウソの言い訳をした。

「ふ…ん…俺は忘れ物を取りになっ」

言って柊は自分の机からDVDを取り出し鞆に入れた。

その柊を見ながら、約三年ぶりに柊と会話をした麻梨子は感激していた。

「じゃあ俺行くけど、いくら日が長いとはいっても遅くまで居ると帰り危ないぞ」

言って、柊は教室を出ようとした。

（え！え！もう行っちゃうの！？）

麻梨子はこの時を逃すともう二度と自分の想いを柊に告げられな

いと思った。そう思うと、

「待って!!」

無意識に柊を呼び止めていた!

振り向く柊、我に返る麻梨子。

まったく対照的な心境の二人が向き合う。

顔が赤くなるのを自分で感じていた麻梨子。

「そっその…あ、あの…」

次の言葉が言えない!

「一人で帰るの?」

(違う! そうじゃない!)

葛藤する麻梨子。

「ん!? 一人だけ…」

自分が言ってしまった言葉と、柊の一言で麻梨子は覚悟を決め、

「一緒に帰らない?」

言った。

本当はこの場で、このタイミングで柊に『好き』だと告げたかったが、今の麻梨子にはこれが精一杯の言葉だった。

それを受け柊は面食らった様な顔をしたが、

「あ…別にいいけど…」

なんと麻梨子の申し出を受諾した。

あっさりと要求を受け入れてくれた柊に、麻梨子は一筋の光明を見出した。

「ありがとう」

麻梨子は俯きながら、嬉しさからかすかに微笑みながら言った。

(まだ告白するチャンスはある、あとは私自身の勇気だけ)

麻梨子は自分にそう言聞かせた。

M二四 告白

「じゃ、じゃあ帰ろうか？」

「うん」

柊の言葉に麻梨子は明るく返事をした。

そして二人は教室を後にする。

下校時刻をとくに過ぎていて通学路に学生の姿はほとんど無い。

西日に照らされ柊と並んで歩いている麻梨子。この状況に恥かしさと共にこのまま時間が止まって欲しいと思った。

途中、麻梨子の頼みで公園に立ち寄った。

公園で柊と会話した。麻梨子にとってはこの僅かな一時は今までの三年間の空白を埋めるに十分すぎる時間だった。

そして一通り話し終わった後、柊に『どうして、教室にあんな時間まで居たのか？』を問われ麻梨子は涙ながらに柊への想いを告白した。

流れでとはいえこの三年間心に秘めていた柊への想いをついに告白した。それは心に思い描いていた“理想の告白”にはほど遠いものだったが、自分の柊への想い、柊が好きだという想いを告げる事が出来た。

だが！

「でも…ごめん」

柊から返ってきた言葉は麻梨子の気持ちを受け入れる答えではなかった。

「今俺、好きな子がいるんだ…その子の名前は知らないし、ましてや告白なんてしていない…ただ一目見た瞬間、その子を好きになっていた…その気持ちを隠して君の気持ちに伝えるのは簡単だ…でも、それをしてしまうと、結果、君をもっと傷つけてしまう事になると思うから俺は君の気持ちに伝えられない…いや、こんな俺に伝える権利なんてない…」

柊の答えを聞いた麻梨子は、柊の事を“素晴らしい男性”だと思った。もちろん断られたショックはあったが、偽りなく自分の本心を話してくれた柊に感謝の念すら覚えた。例え柊の今の答えが麻梨子の告白を断るの偽りの答えだったとしても、麻梨子には今の柊の言葉に偽りはないと感じた。実際に柊の言葉は偽りではない。

そう思った麻梨子は同時にこの男性を好きになって良かったと改めて思った。

M二五 もう一つの心

「やさしいのね…」

麻梨子は柊に言った。

その瞬間、麻梨子自身も知らなかった“もう一人の朝倉麻梨子”が麻梨子の心に現われた！

それはこの素晴らしい男性を他の人に渡したくない！という強い気持ち。

次の瞬間もう一人の麻梨子があんなでもない事を言った。

「名前も知らない…告白もしてないって…事は、その人とはまだ恋人関係じゃないって事よね？」

（何を言ってるの私！！）

麻梨子自身も驚く事を言ってしまった！

「え！？…うん」

あからさまに『何言ってるんだコイツ！？』という表情で柊は答えた。

すかさず麻梨子は、

「じゃあ、その人と恋人同士になるまで私を恋人にして！」

もう一人の麻梨子はまたとんでもない事を言った！

決して麻梨子は多重人格ではなく、“もう一人の麻梨子”は柊了希を好きという抑え切れない想いの表現。

麻梨子はその気持ちを抑え込み、ようやく自我を取り戻した。

そして麻梨子は先の自分の発言を受け止め言った。

「こんな事を言うとおかしな女だと思っでしょ？そう思われても良い…自分でもおかしいと思うもの…でも、もう自分でも抑える事が出来ないほどあなたが好き！…愛してる」

麻梨子はその言葉にこれまでの自分の想い総てを集約させた。

それを理解し、朝倉麻梨子という女性を知った柊は。

「あ、朝倉は…それで良いのか？」

訊いた。

柊の言葉に麻梨子は、

「うん…」

言って、柊の胸に抱きついた。

ずっとこうしたかった…。拒否されてもいい。そう覚悟し麻梨子は柊に抱きついた。

すると、柊はそつと麻梨子を包んだ。

（うれしい…ありがとう、柊君…）

麻梨子は例えこれが思いやりや、仕方なく自分を受け入れてくれたのだとしても嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいだった。

「わかった…それで後悔しないね？」

柊はそのまま麻梨子に確認した。

「うん…」

麻梨子は嬉しさを目一杯顕わせた。そして、

「もう少し…このままで…」

麻梨子のリクエストした。

そんな麻梨子の我儘に柊は無言で応え、優しく、そして強く、麻梨子を抱きしめた。

（ずっと、こうしていたい）

麻梨子は心地良さの中で強く思った。

M二六 勢いと冷静さ

『ピリッピリ、ピッピッピリッ…』

突然麻梨子の携帯が鳴った！二人は我に返り体勢を崩した。

麻梨子は慌てて携帯を手に取った。舞衣からだった。

「ごめん！！」

電話に出ると開口一番麻梨子は謝った！

『お姉ちゃん何してるの？夕飯先に食べてるよ』

「うん、友達とカラオケ」

傍に居る柊と電話の向うの舞衣を気にしながら嘘を吐いた。

柊は電話の相手が麻梨子の親からだと思っっているの、麻梨子の心配に反して柊は電話の会話は気にしていなかった。

『まだ帰らないの？』

「うん、あと少しで帰るから」

『そうなの？分かった。』

「ハイ、じゃあ」

おどおどと電話を切る麻梨子。

それを見ていた柊は、

「遅くなったな…家まで送るよ」

もつと柊と一緒に居たかった麻梨子だったが、

「ありがとっ」

明るく言った。

そして、麻梨子の家の前に着いた。

「今日は本当にありがとう」

笑顔で麻梨子は言った。でもまだまだ柊と一緒に居たい！そう思う麻梨子は続けて、

「…良かったら上がっていかない？一緒に夕食でも…」

言った後で、これはいくらなんでも！と悟った麻梨子。

「いいいや、今日はもう遅いし…帰るよ」

動揺しながら断るも悪い気はしていない柊。

案の定断られた麻梨子。しかしその反面ほつとした部分もあった。勢いで誘ってしまったとはいえ、冷静に考えればいざ柊を家に上げてからの事はまったく考えていなかったから。

「そう…また明日ね」

断られた事による残念な気持ちと、失言だったか？という後悔の念で少し沈む。

「ああ…」

そう言つて柊は麻梨子の家を後にした。

M二七 充実感

「ただいま」

家の玄関を開けると同時に麻梨子は言った。

色々な想い、色々な事があつたが永かつた切ない日々から開放された麻梨子の心中は自身でもビックリするほど清々しい。

「舞衣？」

言いながら電気が点いているリビングに入っていった。

「あっおかえり、お姉ちゃん」

「夕飯。まだ残ってる？」

「あるけど、食べて来なかつたの？」

「うん……」

舞衣からの電話の後直ぐに帰宅するのはどうなのか？と思い、柵と別れた後独りで数十分外で時間を潰していた。

「ちよつと少ないかも……」

「いいわよ」

「じゃあ、準備するから」

「ありがと」

舞衣は茶碗にご飯をよそいながら、

「何かいい事あつたの？」

「え！何で？」

「何か嬉しそうだから」

「そつそつ？別に何もないわよっ」

少し焦つて否定する麻梨子。さすが妹。なるべく表に出さないようにしていた麻梨子だったがあつさりと見抜いた。

「ふん……」

そうかなあ？と思いながら、舞衣は茶碗をテーブルに出した。

毎日顔を合わせている姉妹。顔を見れば心境の変化はすぐに判る様だ。

『チーンッ』

電子レンジが終了の合図を告げた。

「お姉ちゃん、じゃあ私先にお風呂入るね」

「うん、食べたたら片付けておくわ」

麻梨子は点いていたバラエティ番組を観ながら、遅い夕食を開始した。

M二八 本当のはじまり・・・

食事を済ませ、後片付けも終えた麻梨子は二階の自室へと引き上げた。

扉を閉め、

「ふ」

大きなため息と共に今まで抱えていた緊張感も吐き出した。

そして制服を脱ぎ、パジャマに着替えるとベッドの上に大の字に寝転がり天井を眺めた。

（これで、良いんだよね？）

心の中で誰に宛てるでもない問い掛けをし、しばらくそのままです。

一〇分程経った頃、麻梨子はベッドから起き上がり、机の引き出しから未開封の手紙の束を取り出した。

それは三〇通はある麻梨子に宛てられたいわゆるラブレター。それらは全て三年になってからの二ヶ月の間に麻梨子が貰ったもの。

堂々と手渡しされたものもあれば、靴箱に差出人の名前も書かずに入れてあったものもあり、後輩の女の子に貰ったものも一通あった！

（皆には悪いけど…）

麻梨子は性格から相手に悪いと思い、なかなか手離す事が出来なかった。しかしそれでは増える一方だったのでクラスが替わる度に思い切って手離していた。

手紙の束を持ってゴミ箱へと移動し、その束をゴミ箱の上で手離した。

手紙の束は軽く散らばりながらも全てゴミ箱へと吸い込まれていた。

（私は柊君の事しか想いません！）

心に強く誓った。

またベッドに戻り、ヘッドボードに置いてある写真立てを手に取

った。そこにはテニスウェアを着て写った柗の写真が納められていた。

麻梨子はそれを胸に抱き、

（明日からもよろしくおねがいします）

明日からの柗の自分への事を気にしながら思った。

・
・
・
・
・
・
・

『トンツトンツ』

部屋の扉をノックする音がした。

「お姉ちゃん、お風呂空いたよ」

廊下から舞衣が知らせた。

「わかった、ありがとう」

麻梨子は『どうなっても後悔しない！』そう心に決め、部屋を出た。

朝倉麻梨子、柗了希。二人の二人にしか解かり合えない愛の物語が今動き始めた…。

・
・
・
f i n

あとがき

SEASONS mwmoryをここまでお読みいただいた皆さん。
作者・COLORです。

この小説家になろう（小説を読もう）細々と掲載しています『SEASONS』という拙い物語。

その物語のスピノフが今回やっていた『SEASONS memory』なのですが、前々から本編とは違うSEASONSの世界を書きたいと思っていました。

そんな思いが集約されたのがこの物語です。

わざわざ本編を中断させてまで書く必要があったのか？という疑問を持たれた方も居るかもしれませんが、その訳をこのあとがきで書かせてください。

まず、SEASONSの世界観で本編とは違う物語を書きたいというのは常々考えながら本編を執筆していました。

それはただ「書きたいなあ」という考えだけで、実際に書くつもりはありませんでした。というか書く余裕がありませんでした。

もし書くなら主人公を朝倉姉妹にしたい。という事くらいしか思い描いていなかったのですが、ある事がきっかけでこうして形になりました。

あるきっかけとは、本編で頂いた貴重な感想でした。

本編は主人公である柊 了希の視点で描いている一人称の物語です。なので、物語は総て柊了希が関わっていないければ描くことが出来ません。

柊が関わっていない所でも当然何かの出来事が起こっているわけ

で、それらは物語の中で書くことが出来ませんでした。そうした書く事の出来ない事柄の中には、終了希以外の人物の心情というものが含まれています。

こうした構成上の障害で、こちら側の意図が巧く伝わっていないのかも？という感じも少なからず受けていました。それがきっかけとなり実際に書く事にしたのがこのSEASONS memoryです。

本編で描く事がタブーとなっているヒロインの心情を描く事で、今後の本編の幅を広げられればという思いで完成させました。

今まで一人称で書いてきましたが、今回は構成の都合上三人称で書いてきました。

これが非常に難しかった。

書き始める前は軽く思っていたのですが、いざ書き始めると文章のおかしさばかりが目についてしまい、それを何とかかうじて読めるものに修正しましたが、終盤は説明文になってしまいました。

さらに一話あたりの文字数が非常に短く、読む側としてはストレスになったかもしれません。本当に自分の素人さ加減を改めて感じました。申し訳ありません。

そして次に起こった問題がどのタイミングでこの物語を掲載するか？

これは書こうと決めた時にどこかで一度本編を中断させないといけないと覚悟しました。

結果、非常に中途半端なところで本編を止めてしまいました…。本編を楽しみにしてくれている読者の皆様には本当にご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした。

今回のタイミングがベストなタイミングだとは思わないのですが、このタイミング以降にするとmemoryの内容が古くなる感じがしたので、今回のタイミングがギリギリかな？と判断して押し切りました。

そんなこんなでお届けした今回のスピノフだったのですがどうだったでしょう…。

物語の構成で苦労した点もせつかなので書かせてください。

既に書きましたが、文章の書き方にも苦労しました。そしてそれ以上に手間取ったのが朝倉麻梨子の心情の表現です！

男の僕には女性の詳しい心情が解かりません！誰かに相談すればもつとマシな物語に仕上がったでしょうが、そういう事を訊くのはさすがに気が引けたのでほとんど一〇〇%想像に任せて書きました。なので、男の理想が詰まった表現になってしまいました。

この状況でこう思っていてくれればという願望みたいなものも入れてしまいました…。

こういう女性もいるんだというふうにとらえてもらえれば…。

そんな女性心理を考えている自分が気持ち悪かった（笑）

どうして本編の物語に至ったかという過去話を中心に、本編とリンクさせたいと思っていた部分も取り入れられました。

ありきたりでありふれた理由から始まった物語ですが、劇的なきつかけというものも模索しましたが、シンプルイズベストな形をとらせて頂きました。

おそらく本編の方で終了希と朝倉姉妹の関係は大きく動いていくでしょう（あまり詳しく書けないもどかしさ）。その最初のほんの一部を今回書きました。

それにしても書いているうちに色々やりたい事が出てきまして、

朝倉舞衣の件なんかはそれです。

演技部に入部したいきさつは本編のどこかでやろうと思っていたのですが、ちょうど出来たのでやってみました。

また、本編の複線の回収やここから本編への複線を張ってたりするので、それらを探してもらえればなあと思っています。

こうして朝倉麻梨子・舞衣の心情を描けた事でこの先の本編も幅が広がるのでは？と自分自身楽しみにしています。

思ったより長くなってしまったスピノフmemoryにお付き合いましたありがとうございました。

引き続き再会する本編もよろしく願います。

SEASONSから引き続き読んでいただいている方々。たまたまこの物語を見付けて読んで頂いた方々。

ここまでのお付き合い本当にありがとうございます。

引き続き本編の方を再開いたしますので、今後も私COLORの作品をよろしく願います。

あ！このあと、memoryのおまけもありますので、よろしければあわせてどうぞ。

長々とあとがきにもお付き合い頂き申し訳ありません、ありがとうございました。

平成三年一月八日 作者・COLOR

おまけ

（今日の部活はすぐに終わる予定だから、午後は絵里と遊ぼう！）
一学期の期末テストが終わり、夏休みまでの短縮授業に入った。
近付いてくる夏休みとともに学生にとっては嬉しい期間になった。

テストが終わり二週間ぶりに再会される部活に出ようと朝倉舞衣は玄関を通りかかった。

（え！）

舞衣は前から来る一人の男子生徒に気付き、驚いた。

（先輩ッ！）

それは柊了希だった。舞衣が中学の頃から気になっていた憧れの先輩。

二ヶ月前、入学式の日に一目見たくて探したが結局会うことが出来なかった柊。実際にその目で彼を見たのは舞衣が中学一年の時以来。

（ど、どうしよう！…こっちに来る！先輩に私を知ってもらっちゃンスだけどいきなり話しかけるのも…）

舞衣は軽いパニックになりながらも短い時間で何とか考えをまとめようとした。すると舞衣は咄嗟の靴箱の陰に隠れた。

（そっだ！）

舞衣は一旦柊をやり過ぎし、彼の背後に回った。

そして、柊に向かい歩き出した！

（すいません、先輩！）

『ドンッ！』

柊の背中に衝撃を与えると同時に、

「キャッ」

舞衣は声を上げた。

振り返った柊はそんな舞衣を見てただ茫然としていた。
すかさず舞衣は、

「すみません！私、携帯を見ていて…ごめんなさい」

早口で言い、さつと両手を後ろに回した。実は携帯など持っていないかったからである。

しかし柊はただ茫然としていてそんな事には気づきもししていない。
「？」

舞衣はただ立ち尽くしている柊を見てもう一度。

「あの…大丈夫ですか？」

柊に声を掛けた。

すると柊はハッとなり。

「んっ？ああ大丈夫…」

ようやく柊が返事した。

「本当にすみません」

いつの間にか柊を見付けた時のドキドキした感情が消えている事に気が付いた舞衣。

「いや、いいよ。気にしなくて」

「そうですか？すみませんでした」

言って舞衣はその場を足早に去った。

柊は何も言えずに舞衣が言ってしまうのを見送った。

・
・
・
・
・
・
・

「ハアッハアッハアッ」

全力疾走したわけではないのに息を切らせた舞衣。

（またドキドキしてきた…！）

柊と会っている最中は最初のドキドキ感は治まっていたが、別れてからまた見付けた時以上にドキドキしはじめた舞衣。

（何？どうしちゃったの私？）

落ち着こうと二、三回深呼吸し、部活をする視聴覚室へと足を進めた。

（ダメだ、先輩が頭から離れない！）

二時間後、演技部のミーティングが終わり、舞衣と中江絵里は校舎を後にした。

「舞衣？」

「ん？」

「部活の前に何かあったの？」

「えっ！うん、何にもないよ」

普段通りにしているつもりだったが絵里には見抜かれていた様だ。
「そう？それなら別にいいけど……」

「ねえ絵里、今日ヒマ？」

「うん、ヒマ」

「じゃあさ、久しぶりにボウリングに行かない？」

「あ、良いね。行こっ」

「じゃあ、お昼食べたら家に行くね」

「じゃあ、後で」

「うん」

二人は二手に分かれた。

（うゝ、さすが絵里。バレた……）
等と考えながら家に着いた。

『ガチャッ』

玄関を開け、

「ただいま」

言いながらリビングへむかった。

そして、リビングの扉を開け、

「あゝお腹空いた」

舞衣は言いながらリビングに入った。

このあと、舞衣は衝撃的な光景を目の当たりにする！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8652i/>

SEASONS memory

2010年10月11日12時45分発行